

地域における保育者のライフヒストリー

－八戸の元保育園園長の事例を中心に－

渡 辺 一 弘

中国四国教育学会編『教育学研究紀要』（CD-ROM版）第56巻 別刷

Reprinted from ANNALS OF EDUCATIONAL RESERCH

VOL.56 2010

地域における保育者のライフストーリー

— 八戸の元保育園園長の事例を中心に —

渡辺一弘

(別府大学短期大学)

I. 問題の所在

本稿は、青森県八戸市において 30 年以上保育園園長を務めた人物のライフストーリーを検討し、高度成長期以降の地方中核都市の保育園を取り巻く状況の変遷を考察したものである。

地域において歴史的に見て、特徴的な教育的風土や保育環境をもつ地区のベテラン保育者のライフストーリーを検討することは、その地域全体の保育を取り巻く背景・風土を検討するうえで、一つの指針を示すことができると考える。筆者は、そのような地域として青森県八戸市白銀・湊地区を事例として取り上げた。その理由として、第一にこの地区が、戦後初期の農繁期託児所の伝統をもち¹⁾、大正時代、新教育運動の先進地域として実践活動が注目され²⁾、戦後も湊小学校・湊中学校を地域の教育の核とした、教育熱の高い地域³⁾だからである。第二に、この地域は戦前から大火・大地震といった災害に何度も見舞われており、戦後も昭和 35 年 5 月「チリ地震津波」、昭和 36 年 5 月「白銀大火」⁴⁾、平成 6 年 12 月「三陸はるか沖地震」、と何度も大きな災害に見舞われていて、地域の教育・保育関係の資料の散逸・焼失も著しく、記述資料が極端に少ない状況にあり、記述資料を補うものとしても、本研究の意義が見いだせると考えたからである。

そこで筆者これまで 2 回に渡り、日本保育学会大会⁵⁾において、戦前から戦後にかけて小学校の教員を務め、高度成長期に保育園を開設し、平成 15 年まで園長を務め、現在も理事として保育園運営に関わっている人物 K 氏のライフストーリー⁶⁾を聞き取り調査を中心に検討した。その結果、主に以下の二点が明らかになった。

1. この湊・白銀地区という地域特性が、K 氏のアイデンティティの確立に多大な影響を及ぼしていると考えられる。
2. 昭和 60 年代から平成に入る頃にかけて、保育園を取り巻く状況が大きく変化した。

本稿では、これらを踏まえて、分析していない聞き取り調査の残りとして、新たな資料を検討し、改めて高度成長期以降の地方中核都市の保育園を取り巻く状況の変遷を明らかにすることを目的とする。

II. 研究の対象と方法

(1) 対象

対象は青森県八戸市白銀・湊地区の M 保育園と元園長の K 氏である。M 保育園は、昭和 43 年 9 月に社会福祉法人 M 保育園として開設し、K 氏が法人の理事兼園長に就任した。M 保育園は、「健康を基本とし、思いやりの心、生活習慣の態度を養う」を保育方針とした、しつけ重視の保育を行っている。

K 氏は、大正 13 年八戸市湊に出生。実家は漁業を営んでおり、網元であった。昭和 16 年、地元の女学校を卒業後、代用教員になり、昭和 20 年、小学校教員を結婚退職。その後、会社勤めを経て、昭和 23 年、専業主婦となる。子どもに手がかからなくなった昭和 40 年代に入って、社会福祉法人 M 保育園開設、園長に就任、平成 15 年 3 月、園長を辞任、現在は、副園長兼社会福祉法人の理事を務めて

いる。なおこれまでの功績が認められて、K氏は平成19年の秋の叙勲で、瑞宝双光章を受章した⁷⁾。

(2) 八戸市白銀・湊地区の概要

M保育園が在る青森県八戸市(人口約25万人)は、太平洋を臨む青森県の南東部に位置し、地域の中核都市である。城下町、水産都市、新産業都市であり、北東北随一の工業都市として発展している。園の設置地区である八戸市白銀・湊地区は市の東部に位置し、かつては漁村とわずかな畑しかなかったが、その後八戸市の漁業の中心地区となり、商業地と住宅地も整備された地区に発展したが、近年は一部斜陽化も進んでいる。参考までに、平成22年4月現在八戸市の認可保育園は全部で70(公立2、私立68)あり、その内、白銀・湊地区には15(私立15)あり、比較的保育園が多い地区といえる。

(3) 方法

平成18年8月1日、同年12月9日、平成19年1月27日、同年5月12日、同年12月17日、平成20年5月7日の計6回にわたり、M保育園への訪問調査を実施し、元園長K氏に聞き取りを実施した。1回目の調査では、園の沿革や保育方針など全体的な資料の閲覧とそれらについての聞き取りを、K氏に対して行った。2回目以降の調査では、K氏のライフストーリー、地域の歴史についての全体像についての聞き取りを行った。具体的な聞き取り方法は、M保育園の事務室において現園長同席の下、各2時間程度5、6つの質問を行い記録メモをとった。録音や録画を行わなかったのは、K氏から「雑談しながらメモを取る形式」なら聞き取りに応じる、という許可を得たからである。現園長の同席の理由は、彼女が元園長の娘であり、K氏の記憶の曖昧な点を一部確認・補足できることと、方言の微妙なニュアンス、特に八戸の「浜言葉」の解説をしていただけるからである。

4回目の調査の途中から聞き取りに際し、K氏の発言内容が質的に変化していることを感じたので、質問に答える形式から、あるテーマについて自由に話していただくことに重点を移した。また、聞き取り時間を少し長くした。具体的には、M保育園の事務室において現園長同席の下、1回の聞き取り際し3時間程度を費やし、先ず初めに5、6つの簡単な質問を行い、その質問の答えに基づいてテーマを抽出し、そのテーマについて自由に話していただき、筆者はその記録メモをとった。

本稿では、これらの聞き取り調査の内容を再検討して、未整理分の聞き取り調査の内容を加えて、新たな記述資料による補足も行う。

III. 結果と考察

K氏への聞き取りより、先ずK氏の略歴に関する発言と筆者の説明を示す。なおK氏の発言、その他の人の発言の引用には全てカギ括弧を付けた。

〈略歴〉

①生年・出生地

大正13(1924)年、八戸市湊に出生(現在、86歳)

「家は漁業を営んでおり、網元でした。母親も家を手伝っていました。八戸は、今は『イカとサバの街』ですが、昔(戦前)は『イワシの街』でありました」

八戸の白銀海岸の漁場は、イワシ漁が盛んで、その最盛期はK氏が生まれた、大正12、3年頃で、海岸いっぱいイワシが積み上げられ、煮干しにもされたが、そのほとんどは、しめかす(*メ粕、ゆでて搾った搾りかすの肥料)に製品化された⁸⁾。

②子どもの頃の様子

「子どもの頃の湊地区は、半農半漁の村で、浜には釜場があり、釜にイワシを入れて炊き、それを肥料(干鰯)にしました。子どもは、この作業のお手伝いをした」(下線は筆者、以下同様)

「子どもの頃、『白銀・湊には嫁にやるな』と言われていました(女性がこき使われる、働かせ

られるから)。また、八戸でも特に浜地区では、『女に学問は要らない』と言われていました。またこの他に、父親から言われた言葉として覚えているのは『働くと貧乏が追いつかない』という言葉（一生懸命働くことを推奨した言葉）です」

「小学校時代、父から家で声を出して本を読むと叱られました」

「『おなごに学問は要らない』『金さえ儲ければいい』というのが、叱られた理由ですが、ただしこの考え方は、働いてお金を儲けることに対する、良い意味でのプライドというか誇りであったと思います。子どもながらに、この地区の子どもの教育に対する考え方はこれでいいのか、と思いました。このことが、後に教育者・保育者になる原点だったと思います」

K氏の最後の発言は、聞き取り調査の度に、必ず聞かされた。幼少期の体験が、その後のK氏の長い教育・保育・福祉との関わりに繋がっているのは間違いないであろう。

③学歴・職歴

昭和13年、八戸和洋塾（後の白菊女学校、現在の八戸聖ウルスラ学院高等学校）入学

昭和16年、同校 卒業

「卒業後、中沢村中野小学校（現八戸市南郷区）の代用教員になりました。女学校の同級生50人中4人が各小学校に振り分けられて教員になったのですが、就職の時、教員の資格は持たず、就職後、働きながら「初訓導」「訓導」の二つの資格を取りました。小学校の教員になったきっかけは、女学校の卒業時に成績が上位だったので、強制的にこの地区の小学校の教員に振り分けられただけです。しかし、心のどこかに教職の道に進みたいという気持ちは少しはあったと思います」

昭和20年4月、小学校教員を結婚退職、家庭に入る

「夫は小学校教員、その親戚筋も教員でした。その後出産を期に退職しました」

昭和21年4月、株式会社東京芝浦電気勤務

昭和23年6月、専業主婦となる

子どもに手がかからなくなった昭和40年代に入って、

昭和43年9月、社会福祉法人M保育園開設、理事兼園長就任

「保育の道へのきっかけは、いつもお話するとおり、子どもの頃、勉強していると親に『おなごに学問は要らない』『金さえ儲ければいい』と叱られ、子どもの頃から、この地区の子どもの教育に対する考え方はこれでいいのか、と思っていたことと、昭和40年代前半にこの地区に子どもが多かったからです」

昭和40年代前半は、この地域の特に住宅地が整備され、発展した時期である。その背景には、八戸地区が昭和39年に、新産業都市に指定されたこととも大いに関連がある。

開園当時の状況については、以下のように説明している。

「子どもがたくさんいる状況で大変でした。ただ、保育士が手をかけられない分、子どもたち自身が今よりも自立していました。母親の中には、子どもを家の中に入れてまま、カギをかけて働きに出ていた人もいました。その後、私は長く保護司の活動もやりましたが、この当時の経験が役に立ったと思います。また苦勞した点、困った点は特にありません。ただ、親はみんな自分の子どもだけは可愛がるものだな、と実感しました」

その後、昭和 50 年代に入ってから、K氏は多くの社会活動に関わるようになった。

昭和 50 年 4 月、八戸市行政員（～昭和 61 年 3 月）、同年 10 月、統計調査員（～平成 7 年 4 月）
昭和 55 年 3 月、保護司（～平成 16 年 7 月）
昭和 59 年 4 月、八戸市保育連合会理事・副会長（～昭和 61 年 3 月）
昭和 61 年 2 月、新園舎建設

「昭和 61 年 2 月に新しい園舎を建設しましたが、その頃から平成にかけて、保護者を取り巻く環境、地域の環境が大きく変わったと思います」

「開園当初（昭和 40 年代前半）と比べて、保育園を取り巻く状況も、保育内容も大きく変わりました。開園当初は、特に保育の仕事にやりがいを感じました。この辺（浜地区）は昔から、漁業関係の共稼ぎが多くて、専業主婦が極端に少なかったので、子どもを保育園に預ける親が多く、子どももそれを知っていたから、わがままを言いませんでした」

昭和 60 年代から平成に入る頃にかけて、保護者を取り巻く環境や地域の環境が大きく変わったという発言も、調査の度に何度も聞いた。これについては、K氏は以下のように説明した。

「20 年前頃から、親の仕事が楽になり、余裕が出来て、（保育園で）親が自分の意見を言うようになりました。保育に口を出すようになりました。昔は、悪い言い方をすれば、子供が泣こうがわめこうが、（保育園に）あずけた後は、園に任せてくれました。浜は、特にこの傾向が強かったです。園もやりやすかったし、指導もしやすかったです。親も（園に）安心感をもっていました。一般的な親の世代の差より、こちらの方が原因だと思います。私自身の保育に関する考え方は、あまり変わっていないと思います」

親の仕事が楽になった背景は、この地区の中心的な産業である漁業・水産加工業の機械化の発展が大きいとのことであった。

平成 9 年 4 月、八戸市保育連合会監事（～平成 15 年 3 月）
平成 15 年 4 月、社会福祉法人M保育園、理事兼副園長（現在に至る）

次に、いくつかのトピックスや地域の特徴について、項目ごとにK氏の発言と筆者の説明を示す。
・保育園の保育内容等について

「資料は、戦前から昭和 40 年代の半ばまでは、ガリ版で作っていました」

「開園当初（昭和 40 年代前半）と比べて、保育内容も大きく変わりました。昔は、何でも保育者が最初から自分で作りました。例えば、紙ひこうきなど普通の画用紙から作って、紙の長さや厚さを工夫して、飛ばし方を考えました。最近の若い保育士は、ホームセンターのようところで紙ひこうきの型紙を買ってきたり、すぐにパソコンを使ったりして、きれいに作りすぎると思います。型紙やパソコンの利用が、すべて悪いとは言いませんが、少しでもいいから、必ず手作りの部分を残して欲しいです」

これに関連して、保育教材を購入し始めたきっかけは、研修会とNHKの幼児教育番組の影響が大きいとのことであった。

・研修について

「研修会は、園内・園外を問わず、開園当初から実施し、参加していました。ただ最初の頃は、例えばリトミックや幼児英語といった、何か特定の保育技術習得を目的としたものではなく、基本的なしつけについてのものが中心だったと思います」

・大正新教育

「大正時代から昭和にかけて、湊小学校が、いわゆる大正自由教育の実践で有名であったことは、私も良く知っています。またこの地域が教育に関して意識が強い地域であることは事実だと思えます。ただ大正自由教育の実践については、教員やサラリーマンといった、この地域のエリート階層にしか浸透しなかったと思います。この地域のエリート層である、サラリーマン家庭のことを、『タダイ様』と呼んだ（昭和30年代頃まで使われた）。ただ居るだけで生活していける人、つまり汗水たらして働かないで食べていける人、という意味です」

この「タダイ様」という言葉は、筆者が平成19年8月に、八戸市立美保野小中学校（*市内唯一の小・中併置校）校内研修の外部講師として招かれた時に、先生方にお聞きしたら、50代の青森県南部、岩手県北出身の先生方はご存じであったので、北東北の割と広い範囲で使われていた言葉であろう。

・季節保育所（託児所）

「白銀の婦人会が、戦前、漁で母親も忙しい時に、季節保育所を開いていました。それが現在の白銀保育所です。利用者は多かったと思います」

湊地区にも、昭和10年には既に託児所が存在していた。これは湊の処女会（*未婚の女性の親睦団体で元々は婦人会の一部であった）が運営・管理し、湊小学校や地元の町役場の一室を借りて保育を行っていた⁹⁾。

・子守学校

「子守学校は、私が小学校時代（*昭和11年卒業）に、白銀小学校の中に子守学級としてありました。月に2、3日程で、1クラス30数人の中の数人が子守学級の部屋に行っていました。自分も一度だけ妹をおんぶして参加しました。おんぶした子どもがぐずったり、おしっこをもらしたら、『ひまください』と先生に言ってから、教室の外に出て、あやしたり、おしめを替えたりしました」

弟や妹を小学校に連れて来るといふ行為は、この地区では戦後も行われていたようである。白銀小学校の百周年記念誌における卒業生の座談会（*K氏も出席）で、昭和25年の男子卒業生の回想に以下のようなものがある。

「（略）女の子たちは、学校へ一クラスに四、五人は子どもを必ず連れていきましたね。弟や妹の子守りですね。ワァーと泣くと授業が中断するので先生がかわってやったりした。イカが非常にとれる時代で、イカがとれると一クラスに大体三分の一ぐらいしか子どもがいなくて、休んでいるのがあたり前みたいなのでしたね。授業にならない時がしばしばありました。私の家は床屋でしたから直接浜に関係がないが、あたりが休むものですから、『ひまください』『理由は』というと、『イカが大漁で、イカさきに行きます』と、これで十分通った時代です（後略）」¹⁰⁾

IV. 分析結果と考察

これまでの分析で明らかになった、1の「この湊・白銀地区という地域特性が、K氏のアイデンティティの確立に多大な影響を及ぼしていると考えられる」点については、この地域の教育熱の高さや、大正自由教育実践の先進地域ということよりも、幼少期に父親から、おなごに学問は要らないと、家で声を出して本を読むことを叱られた体験がもっとも大きいことが確認できた。

2の「昭和60年代から平成に入る頃にかけて、保育園を取り巻く状況が大きく変化した」点については、開園時期は、八戸地区が新産業都市に指定されて、住宅地が広がり、子どもの数は増えたが、漁業関係の共稼ぎが多くて、専業主婦が極端に少なかったため、親が保育園に頼る受け身の常態から、この地区の漁業・水産加工業における職場環境の変化が、結果的として、親が保育園に積極的に関わる関係へと変化させたことが改めて確認できた。

今後の課題としては、まずは今回、諸事情で断念した、ベテランの元保育士の方たちを囲んだ座談会¹¹⁾での聞き取りを行い、K氏の発言の補完と客観性を検討したい。また、K氏と同世代の他地域の保育者のライフヒストリーを比較検討する必要もあるだろう。

【註】

- 1) 八戸市教育史編さん委員会 1974, 508-509 頁。
- 2) 大正時代、新教育運動の先進地域として「湊の新教育」として湊小学校の実践活動が注目され、大正自由教育（新教育）運動の中心人物である玉川学園の小原国芳とも交流が深い地域であった（八戸市教育史編さん委員会 1974, 314-315 頁）。
- 3) この地域の教育熱の高さを示す言葉として、「湊魂」というものがある。八戸市内でもよく聞く言葉で、湊小学校のホームページにおいても、学校紹介の概要や校章の欄に、「信念をもって進んで学び、助け合い励まし合って最後までやり通す「湊魂」との記述がある。湊中学校の創立四十周年記念誌においても、「湊には昔から、学校のことなら何をにおいてもいった気風があり、学校を中心に地域がまとまってきた良き伝統がある」との記述がある（八戸市立湊中学校編 1987, 4 頁）。
- 4) 5 時間以上も燃え続け、白銀町の約 26 ヘクタールを焦土と化し、焼失建物 1043 棟、被害総額 25 億 2 千万円という、八戸市戦後最大の火災であった（白銀振興会 2002）。
- 5) 2007 年、第 60 回日本保育学会大会と 2008 年、第 61 回日本保育学会大会において、それぞれ「保育者のライフヒストリー—八戸の元保育園園長の「語り」を中心に—」、「保育者のライフヒストリー—八戸の元保育園園長の「語り」を中心に—（Ⅱ）」という題目で、聞き取り調査の内容を中心に発表した。
- 6) 発表題目では「ライフヒストリー」という言葉を用いている。厳密には人生の一時期である「ライフストーリー」が妥当であると思われる。しかし、子育ての時期を除いて、ほぼ人生全体を考慮して検討していることから、「ライフヒストリー」という言葉を用いた。
- 7) 『デーリー東北』2007 年 11 月 3 日 第 8 面「子供の育成に一層励む〈瑞宝双光章〉K さん元 M 保育園長（*紙面では実名）。
- 8) デーリー東北社編 1965, 12 頁。
- 9) 八戸市湊尋常高等小学校 1937, 130-134 頁。
- 10) 八戸市立白銀小学校 1975, 59-60 頁。
- 11) 6 回目の調査時に、K 氏の提案により、普段 K 氏が定期的に集まっている、同年代の元保育士の人数人を囲んでの集まりに、筆者も参加させていただき、座談会のような形で聞き取りを行う予定であったが、元保育士の方たちの怪我や病気のため断念した。

【主要参考文献・資料】

- 白銀振興会 2002, 『白銀大火 40 周年記念誌 灯臺』。
谷富夫編 1996, 『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社。
デーリー東北社編 1965, 『北奥羽の現勢』。
中野卓・桜井厚編 1995, 『ライフヒストリーの社会学』弘文堂。
八戸市教育史編さん委員会 1974, 『八戸市教育史 上』八戸市教育委員会。
八戸市立白銀小学校 1975, 『百周年記念誌「白銀小の百年」』。
八戸市湊尋常高等小学校 1937, 『校魂 六十周年祈念』。
八戸市立湊小学校ホームページ, http://www.hachinohe.ed.jp/minato_e/
八戸市立湊中学校編 1987, 『八戸市立湊中学校創立四十周年記念誌 みなとの風光 ★湊中学校の歴史 ★湊町の歴史』。
松田澄子 1997, 「山形県における農繁託児所の成立過程について—子守学校から農繁託児所へ—」『山形県立米沢女子短期大学紀要』32 号 93-100 頁。
水野節夫 2000, 『事例分析への挑戦—「個人」現象への事例媒介的アプローチの試み—』東信堂。